

かげろうの日記

堀辰雄

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）尤^{もつと}も

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）一向^{むとんじやく}無頓著

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと
行数）

（例）「#」さんずい+廿」、第3水準1-86-60」

なほ物はかなきを思へば、あるかなきかの心地する
かげろふの日記といふべし。

蜻蛉日記

その一

半生も既に過ぎてしまつて、もはやこの世に何んのなす事もなく

生きながらえている自分だが、一たい顔かたちだって人並でないし、これと云った才能もあるわけではないのだから、こんな風にはかない暮しをしているのも尤もの事だとは思うものの、只こうやってぼんやりと明し暮しているがままに、世の中に多い物語などをおりおり取り上げて、その端などを読んで見ると、ずいぶん有り触れた空言さえ書いてあるようだから、自分の並々ならぬ身の上を日記につけて見たら、そんなものよりも反って珍らしがってくれる人もあるかも知れない。それにまた、世間の人々が、私のようにこんなに不為合せになったのは、あまりにも女として思い上っていたためであろうかどうか、その例にもするが好いと思うのだ。

何分にももうすべて一昔も前の事なので、さて、何から書き出したら好いのだろうか知ら。まあ、それ以前の取るに足らない程の、好き事なんぞは、それはそれとして、今からもう十何年前の、そう、たしか夏の初めだったと思う、その頃はまだ柏木と呼ばれていたあの方が始めて私に御文をよこされたのである。その最初の時からして、あの方と云ったら外のお方とは変わったなされ方で、普通だったら下じもの女にでもその御文を届けさせようものを、あの方は役所で私の父に先ず真面目とも常談ともつかずに仄めかされて置いて、こちらでそれをどう思おうなんぞという事には少しもお構いなさらずに、或日、馬に乗った男に御文を持って来させられた。その使いの者がまた使いの者で、「どなた様から」と訊かせることも出来ない程、はしやぎ切っていたので、こちらの方ではしかたがなしにその御文を受取ってしまったから、はじめてそれが柏木様からのものである事を知ったのだった。が、見れば、御料紙なんぞもこ

ういう折のになつたものではなかつたし、大層御立派だとお聞きしていた御手跡もこれはあの方のではないのではあるまいかと思われる程のものだったし、どうもすべてが疑わしいので、御返事はどつしたものだらうかと迷っていると、昔氣質むかしかたぎの父はしきりに恐縮がつて、「やはりお出しなさい」と私に無理やりにそれを書かせた。それをきつかけにして、それからあの方は屢私たゞしばしばに同じような御文をおよこしになつたけれど、最初のうちは私の方ではそれほど熱心になれず、返事も出したり、出さなかつたりしていた位だった。

そう云つたごく通り一遍な消息をやりとりしているうちに、その夏も過ぎて、秋近くなつた頃、どうした事からだつたらうか、とうとう私はあの方をお通かよわせするようになった。そうしてその頃はといえば、あの方は何を措おかれても、殆ど毎夜のように私の許もとにお通いになつて入らしたが、そのうちにやがて十月になつた。

その月半ば、私の父は陸奥守むつのかみに任ぜられて奥州へ御下りにならねばならなかつた。それはまだ、私があんまりあの方にもお馴れしても居らず、お会いしている時だつて、ただもうさしぐんでいるばかりだったのを、反つてあの方はいとしがられ、一生お前の事は忘れまいなどと御誓ちかいなすつたりせられはしたものの、果して人の心なんぞは頼みになれるものやら、なんとも言えず不安で、自分の悲しい行末ばかりが思われてならないような日頃であつた。とここで、いよいよ父たちが出立すべき日になつた。みんなが別れを惜あはしんでいる間に、父はふいと私のもとに入らして、御形見おすがりの硯すずりに何かお文のようなものを押し巻いて入れて、それからまた黙つて出て往かれたようだったが、私はそれをすら見ようとせすにいた。

とうとう皆が出立した跡になって、私は少しためらいながら、それにいざり寄って、何だろうと開けて見ると、「君をのみたのむ旅な
る心には行末とほく思ほゆるかな」と認められてあった。見るべき
人が見るようと書き残されたのだろうとあって、私は、それをそ
のまま元のように収めて置いた。それからしばらくして、あの方が
お出いでになったけれど、目も見合わさずに、私がじっと思い詰めたよ
うにしていると、あの方は「こんな事は世に有りがちな事なのに、
そんなに歎いてばかりおられるのは、わたしの事をちつとも頼みに
思っていてくれないからなのだろう」と私を反って恨むように言わ
れるのだった。が、そのうちに、ふと硯にあつた御文を見つけられ、
それを御手に取られてお読み出しになったかと思うと、しばらくの
間それから御目をも放さずに、さもお気の毒なと言いたげなお顔を
なすっていらした。……

その後、日の立つにつれて、そんな遠い旅空にある父の事を思い
やるだけでさえ気がかりでならないのに、私がこうしてもういよい
よあの方お一人にお頼りするより外はないようになればなるほど、
何だかだんだんあの方の御深切がお口ほどでもないように思われて
くる一方で、その心細いことといったらないうのだった。

その明くる年の春から夏にかけて、私はずっと悩み暮らし、八月
の末になって道綱みちつなを生んだが、いまから思えば、まあその頃があ
方も私を一番何くれとなく深切になすって下すっていた頃だったよ
うだ。

ところが、その九月になって、あの方がお出かけになられた跡に
手筈てはこが置いてあつたので、何の気なしに開けて見たら、どこかの女

のもとへ送るおつもりだったらしい御文がしのばせられてあった。私は驚いてどうしたら好いかもわからない位だったが、せめて自分がそれを見たと言う事だけでもあの方に知らせてやりたいと、わざとそれをそのまま放って置いた。しかし、あの方はそんな事には少しも気をお留めにならぬらしかつた。そんな事があってから、私はとても気になってそれとはなしにあの方の御様子を窺^{うかが}っている、或夕方、急に「どうしても往かなければならない所があるから」と仰^{おっし}やうて出て往かれた御様子がどうも不審だったので、人を付けさせて見たら、果して坊^{まち}の小路のこれこれの所へおはいりになったと云う事だった。矢^やつ張^はそうだったのかと、胸もつぶれるような思いで、それからの数夜と云うもの、私は寐^いも寐^ねられず、しかしどうしようもなく一人きりで歎^{なげ}き明かしていた。そんな或夜の明け方だった。誰か訪れて来たものがあるらしく、しきりに門を叩いているようだった。すぐあの方がいらしたのだとは分かったものの、私も少し意地になって、いつまでも戸を明けさせずにいた。やがて私の知らない間に、あの方はすごすごお帰りになってしまわれたらしかつた。おおかた小路の女の所へでも入らしたのだらうと思つた。が、朝になつて、何だかそのままにして置いても気になるし、それかと云つて戸をちよつとお明けしなかつた間ぐらいはとも思うものだから、私は「歎^{なげ}きつつひとりぬる夜の明くるまはいかにひさしきものとかは知る」と、いつもよりか少しひきつくろつた字で書いて、萎^{しお}れかけた菊に挿してやつた。すぐ御返事があつたが、「私だつてお前が戸を明けてくれるのを、夜の明けるまでだつて待つて見ようとしたのだ。が、折悪しく急ぎの使が来てしまったものだから」と書いてあるぎりだった。いつもに変わらず、こちらがこれ

ほどまでに切ない心もちをお訴えしているものを、あの方はさも事もなげにあしらわれようとしかなさらないのだ。どうしてそんな女の事なんぞを私にもっと出来るだけお隠しなすって、いま暫くなり
と、「内裏へ」^{うち} などと仰やっても、私をお瞞し^{だま}になっ
て呉れられなかったものなのだろうか。

それからだっても、あの方はいかにも何気ないような御顔をなす
って、おりおりお見えにはなつたが、それすらだんだん途絶えがち
になり、そのうちにその堪え難いほどだった冬も過ぎ、漸^やつと春が
立ち返って、三月になった。三日の節句にも、桃の花なんぞを飾り
つけてお待ちしていたのにとつとお見えにならなかつた。近頃姉
のもとへしげしげとお通いになって来るいまひと方も、いつもはそ
んな事など一度もなかつたのに、その日だけはどうしたわけか、お
見えにならずにしまった。が、その翌日、御ふた方とも打揃つてお
見えになった。ゆうべから待ち^わびていた女房どもが、そのままに
してしまふのも何だからと云って、きのう飾つてあつた桃の花を再
び取り出してきたので、その花の一と枝を折って手にすると、それ
はもう少し萎れかかっていた。私はそれを見るとつい胸が一ぱいに
なつて、それに手習でもするよな気で「待つほどのきのふ過ぎに
し花の枝はけふ折ることぞかひなかりける」などと書き散らしてい
ると、それをいきなりあの方が奪いとられ、その枝をかざしながら
お読みになつて、「何だ、この歌は。お前とは一生をかけて誓つて
いるのじゃあないか。こんな一年毎に咲く花なんぞとはお前が違つ
ているの知らないのか」などと、いつもの真面目とも常談ともつ
かないよな調子で、私をお虐め^{いじ}なさるのだった。

その事がいつか姉のもとに来て入らしたいまひと方の御耳にもはいったと見え、「私もゆうべはわざと余所よそで過して来ました。花があるので好んでこちらへ来ただけなのだろうなどと言われそうでしたから」などと、そのお方までがしたり顔にそんな事を言つてよこされた小憎らしさ。

それからまだ二た月とは立たないうちに、私はいつのまにやら只一人で起き臥しする事の多いような身の上になりながら、姉の方へばかり絶えずいまひと方が出遣ではい入りなすつていられるのを、胸のしめつけられるような気もちで見て暮していたところ、五月になると、そのお方さえも、まるでそう云う私をお避けなさりでもするかのように、余所へ私の姉をお連れして往つてしまった。それから私はほんとうの一人ぎりになってしまったのだった。が、こう云うはかない身の上になつたのは、私ばかりではなく、私なんぞよりもずっと前からあの方がお通いになつて、お子様などもたんとおありなさると云うお方のもとへも、この頃は全くあの方は絶えられているとお聞きして、ましてどんなにお心細い事だろうかと、おりおり消息などをさし上げては自分でもわずかに気をまぎ紛らわせようとしていた。が、おとなしそうなそのお方は、なぜか知ら（或は私だけが別して人の苦しみというものを過当に見るようなところがあるのだろうかしら）、いつも私の相手になるのをお避けになるような素気すげない御返事しかおよこしにならなかつた。誰もかもみんなそういう私をお避けになつたと見える。

そのうちに六月になつた。月初めからずっと長雨ながさめが続き、此頃は

とりわけてあの方もお見えにならなかつた。

これまででだったらこんなことは無かつたのに、どうしたのか、私
はまるで心が空虚うつろになつて、そこいらに置いてあるものさえ静かに
見られない癢かゆがついてしまつていた。「こんな風にしてあの方は私
とお絶えなさるおつもりなのかしら。そうだとすれば、何かあの方
の事を自分に思い出させてくれるようなものは残っていないかしら」
なんぞと、そんな事まで考え出しながら、あの方がこうしてお離かれ
になればなるほど、あの方に対してついぞいままで覚えのなかつた
位にお慕わしさのつゝつて来るような自分をば、自分でどうしよう
もなくていた。すると十日ばかり立つて、あの方から珍らしく御消
息のあつたのを読んでいると、何くれとお書きになつて、最後に「
帳とまりの柱に結わえて置いた小弓の矢を取つてくれ」と言われるので、
まあ、あの方のこんなものが残つていたのにと、やっと気がつき、
それを取り下ろして持たせてやるような、悔やしい事さえもあつた。

そんな風に、あの方がますます私からお離かれがちになつていられ
る間も、私の家は丁度あの方が内裏うちから御退出になる道すじにあた
つていたので、夜更けなどに屢しばしばあの方が私の家の前をお通りすぎな
さるらしいのが、折から秋の長い夜々のこととて、ともすれば私は
目覚めがちなものだから、いくら聞くまいと思つていても、手にと
るように耳にはいつてくる事がある。そんな時などには「何とかし
てあれだけは聞かずにいたいものだが」と思いながら、しかも
その一方では、いましがた私の家の前をつづけさまに咳せきをなさりな
がらお通りすぎになつたあの方が、だんだんその咳と共に遠のいて
往かれるのを、何処までも追うようにして、私は我知らず耳そばだを側立

てているのだった。……

その二

それから十年ばかりと云うもの、私の父はずっと受領として遠近の国々へお下りになっていた。たまさかに京へお上りになっても、四五条のほりにお住いになるので、一条のほりにあつた私の家とは大へん離れていた。それで、こうやって私たちが人少なに住んでいた家は、誰も取り繕つてくれるような者なんぞ居なかつたので、次第次第に荒れまさつて来るのを、私はただぼんやりと眺めながら、漸く成長して来る道綱一人を頼みにして、その日その日をはかなげに暮しているばかりだった。

そのうちにやっとその幼い道綱が片言まじりに物が言えるようになって来たが、それも、いつ聞き覚えたのか、あの方がいつもお帰りの時に、「そのうちに又　」などと仰やつて出て往かれるのを、「又ね……又ね……」などと口真似をして歩きまわったりしているのだった。　　そのようなわが子のあどけない姿を見て覚えすほほ笑まされながらも、どうしてもまあこうも自分はこんな幼な子の無心の振舞の中にすら、それに写る自分の悲しみをしか見出せないのだからと歎かずにはいられないのだった。

こういう私たちの日頃の有様を御覧になつても、あの方は一向一無頓著そうに、たまにお出になつたかと思うと、又すぐお帰りになつて往かれた。大かた私たちが心細がつているだろうとさえも思いにはならないものと見える。いつも云いわけがましく「この頃は為事が多いので　」などと仰やつては入らっしゃるけれど、まあ

ちよつとでもこれに目をお留めなすつたら、この数知れぬほどな蓬よもぎよりもまさかお為事が多いとは仰やれまいにと、私はわが家の荒れ放題になった庭をいまさらのように見やつては、少し自嘲的な気持ちにもなつて、それがますます荒れ果てるがままに任せておいた位だった。

そんな私に向つて、「まだお若い身空ですのに、どうしてそのようにばかりして入らっしゃるのですか」と気づかつては、熱心に再婚などを勧めてくれる人もあつた。それなのに、あの方はまたあの方で、「おれの何処が気に入らないのだ」と云つた顔つきをなすつて、少しも悪びれずにいらっしゃるので、本当にどうしていいのやら、私は思いあぐねるばかりだった。何とかしてこの胸に余る思いをつぶさにこの人にも分からせようがものはないかと思えば思うほど、私はあの方に向つては「ことも物を言うことが出来ずにしまふのだった。」

「今のようにときどき思い出されたように入らっしゃるよりか、いつその事もうすつかりお絶えになつて下すつた方がどんなに好いか知れやしない」などとまで私はその日頃考え出していたものだった。又意地の悪い事にはそんな時にかぎつてあの方がひよつくりお見えになつたりする。「どうして私のところへなぞ入らしたのですか」と云つた顔をしたぎり、私が何も言わずにいるものだから、あの方も何だかひどく工合悪そうにしていらっしゃる。まあ、折角こうしてお出になつていられるのだから、こうばかりしていてもと、つい弱気になろうとする自分を、私は一生懸命に抑えつけて、あの方がいかにも物足らなそうにお帰りになるがままにさせている。……

そんな事ばかり繰り返しているうちに、とうとう或日などはあ

方もすっかり気を悪くされた見え、つと端の方へ歩み出されてから、幼い道綱をお呼び出しになって何か耳打ちをなすっていらした。だが、そのままいつにない怨み顔をなされて出て往かれてしまった。あの子ははいつて来るなり、私の前でしくしく泣いている。「どうしたの」と尋ねて見ても返事もせずにおいた。あの方にきつとおれはもう来ないぞ、とでも言われたのだろうと思って、それ以上尋ねるのは止めて、いろいろ慰めたり賺したりしていたが、それから何日たっても、あの方からは音信さえもなかった。「まさかと思っていったのに、本当にこのままお絶えなさる気なのかしらん」と不安そうに思いながら、それでもまだそれを半ば疑うような気もちで暮らしている、或日の事、こないだあの方の出て往かれる時に髪をお洗いになった。「#「さんずい+甘」、第3水準「-86-60」坏の水がそっくりそのままになっていふと気がついた。よく見ると、その水の上にはもう一面に塵が溜まっていた。「まあ、こんなになるまで」「と私は胸をしめつけられるような心もちで、それに何時までもじつと見入っていた。そんな事さえも、その日頃にはとかく有りがちなのであった。

そういう一方に、あの坊の小路の女のところでは子供が生れるとか言つて大騒ぎをしていたらしかつたが、その頃からどう云うものか、あの方はあんまりその女のもとへはお出にならなくなつたとか云う噂だった。その女の事を憎い憎いと思いつめていた時分に「いつまでも死なせずに置いて私の苦しみをそっくりそのまま味わせてやりたいものだ」と思つていた通りに、すべての事がなつて行きそつた上、その生れたばかりの子供までが突然死んだと聞いた時

には、「まあ何んていい気味だろう。急にそんなになってしまわれ
て、どんな心もちがしているかしら。私の苦しみよりかいま少し余
計に苦しんでいる事だろう」などと考えて、本当に私は胸のうちが
すっぱりとした位だった。　こんな人らしくもない心の中まで此
処に書きつけるのは、ちよつとためらわれもしたけれど、こう云う
ところに反って生き生きとした人の心の姿が現われているかと思
えるので、この私と云うものをすっかり分つて貰うためには、やは
りそう云うものまで何もかも私はこの日記につけて置きたいのであ
る。

さて、そんな事のうちに数年と云うものは空しく過ぎ去つてしま
ったが、そう、何でも五月の二つあつた或年の事である。その閏五
月には雨が殆ど絶え間もなしに降り続いてた。そうしてその月末
から、どうしたのか、私は何処と云うこともなしに苦しくつて溜ま
らなかつた。もうどうなつたつて好いと思つて自分の事ではあ
るし、そんな命をさも惜しがつてでもいるようにあの方に見られた
くはないと思つて、私は瘦せ我慢をしていたが、側の者たちがいる
いろと気づかつて、しきりに芥子焼なんぞという護摩なども試みさ
せるのだけれど、一向その効力はないのだった。　そうやって私
がひどく苦しみ続けている間も、あの方は謹慎中だからと言われて
一度だつて御見舞には来て下さらなかつた。何でも新しい御邸をお
つくりなさるとかで、そちらへ毎日のようにお出になるついでに、
ちよつとお立寄りになつては、「どうだ」などと車からもお下りな
さらずに御言葉だけかけていらつしやるきりだった。そんなような
或物悲しく曇つた夕暮に、私がすっかり気力も衰え切つていとこ

るへ、そちらからお帰りの途中だといわれて、あの方は蓮の実を一人に持たせて、「もう暗くなったので寄らないけれど、これは彼処のだから御覽」とことづけて寄こされた。私は只「生きているのかどうかも分かりません程なので」とだけ返事をやって、そんな蓮の実なんぞは見る気にもなれずに、そのまま苦しそうに臥したきりであったが、そのような大そうお見事らしい御邸だって、そのうち見せてやろうなどと仰おっしやっつて下すつてはいるものの、こうやって自分の命のほども分からず、それにまたあの方のお心の中だって少しも分からないしするので、どうせ自分はそれを見ずにしまう事だろうなどと考え続けていると、その心細い事といったら何んともかとも言いようのない程であった。

そんな工合に何時までたつても同じような容態だったので、名高い僧なども呼んでいろいろと加持を加えさせて見たけれど、一向はかばかしくはならずにいた。そこでしまいに、事によるとこのまま自分もはかなくなってしまうのかも知れない、そうなたつて自分の身なぞは露ほども惜しくはないけれど、只あとに一人きり残される道綱がどうなることか知らん、と私は急にそれが気がかりになつて、或日、いかにも心もとないあの人だけれど、まあそれでもと、苦しいのを我慢しいしい、脇きょうそく息によりかかりながら、やっとな筆を手にして、遺書と云うほどのものではないが、ともかくもあの方に道綱の事をくれぐれもお頼みし、それからその端に「他の人には言われなようなおかしな事までいろいろ申し上げましたけれど、どうぞそんな事をもお忘れなさらずにいて下さいませ」などと書き添えていた。がそのうち、知らず識しらずの裡うちに、あの方に対する自分の気もちがいつもほど苦くはなくなっているのに気がついた。そうし

てあの方との事で今の自分に残っているものと云ったら、不思議に心もちのいい、殆ど静かな感じのものばかりであった。恐らく、私の身の極度の衰えがそういう静けさを自分の心に与えていたのであろうか。

そうこうしているうちに、六月の末頃からいくぶん物心地がついて来たようで、秋も過ぎ、冬になった時分にはもう大ぶ私も人心地がしてきた。その間に、あの方たちは新築した御邸の方へお移りなつて往かれたが、私だけはやはり思ったとおり、この儘まま此処にこうしておれば好いと云う事になつたらしかつた。

が、そうなつたらそうなつたで、別にどうと云うこともありはしないのに、やっと恢復かいふくし出した私はその頃になつて反つて何だか氣もちが落着かずにはかりいたけれど、十一月になつてから雪がたいへん降つた。そんな雪のふりつづいた頃、どうしたのか、まだ充分に癒いえ切きつていなかつたらしい身うちにめつきりと衰えが感ぜられ、世のさまざまな事、ことにあの方の事なぞが言いようもなく辛く思われた一日があつた。私はその日は日ぐらしそんな雪を眺めたり、又、いつぞやの殆ど死ぬばかりだつたような日々の事だの思い出したりしながら、「ああ、雪なんぞだつたら、いくらこんなに積つたつて、やがてまた消えて往つてしまえるのだ。それなのに、私は一生のうちになつた一度の死期をも失つてしまつたような……」などとさえ悔やみ出していた。……

その三

そのうちに道綱も漸く成人して来た。が、その頃の事になると、まだついこの間の事のように何もかも自分に一どきに思い出されてしまうものだから、さてそれを書こうとすると、反って何だか書かずともよいような事までも書いてしまいそうな気がしてならない。…

先ず思い出すのは、これも書かずともよい事かも知れないが、まあ、思い出すがままに書いて見ると、或年の丁度一若苗わかなえの生い立つ頃、そう、若苗といえは、そんな事があった数日前、私はあんまり所在がないので草などの手入れをさせていたら、たくさん若苗が生えていたので、それを取り集めて母屋の軒端にそっくり植えさせて水なども気をつけてやらせていたのだった。が、その日私が見に往つてみると、それはもう残らず色が変って葉なんぞもすっかり萎れしおかえってしまっていた。この頃まるつきりあの方のお見えにならない私の家のものといったら、まあ、こんな軒端の苗までも私の真似をして物思いをする見たいなどと、又してもそんな事を考え出していると、そこへあの方から珍らしく御文があつた。「いくらこちらから文をやっても返事がないので、はしたなく思われそうだから遠慮をしていた。今日でも伺いたいと思うが」などと書いてある。御返事は上げまいと思つたが、側の者たちにかれこれ言われて、私はやっとそれを書いて持たせてやった。それからすぐ日が暮れた。まだそれが行きつかないだろうと思う時分に、あの方が行きちがいにお出になつてしまった。皆に「何かわけがおりなのかも知れません。何気ないようにして御様子をごらん下さいませ」などと言われて、私も少し気をつけていた。が、あの方は「物忌ものいみばかり続いていたのだ。もう来まいなどおれが思うものか。どうも

お前がすぐそうひがむのが、おれにはおかしい位だ」などといかにも裏もなさそうに仰るので、こちらも何だか気の抜けてしまう位だった。「明日は用事があるから、又明後日でも」などと仰やうて帰って往かれたけれど、私もそれを本気にはしないものの、若しかしたらと思い返しているうちに、だんだん日数が過ぎて往くばかりだった。

やはりそうだったのかと気がつくにつけ、前よりも一そう心憂く思われて、相変らず自分の思いつづけている事といったら、仏にお祈りしてでも何とかして死にたいものだと言うような事ばかりだったが、あとに一人残る道綱のことを考えると、それも出来そうもないのだった。「お前が早く成人して、安心の往けるような妻などに預けてしまえたら、どんなに好いだろうに。いま、わたしが死んだら、どんな思いをしてお前が一人でさすらう事だろうと思えば、ほんとうに死ぬのも死にくい。まあ、形かたちでもかえて、世を離れたらと思うのだけれど」
 「と私が独言でも言うように言っていると、まだ深くは何もわからぬらしいが、あの子も悲しそうに「そうおなりになったら、まるも法師になりとうございます。この世に交わって居りましても、何になるでしょう」と言いながら、目に涙を一ぱい溜めている。私はそれを見ると、やっと気を取りなおしながら、いまの話を常談にしまおうとして、「そうなつて鷹も飼えなくなられたら、どうしますか」と言うと、道綱はいきなり立ち上って往つて、自分の飼っていた鷹を籠かごから出して矢のように放してしまつた。それを傍で見ていたもので泣き出さないものはなかつた。

丁度その暮がたに、あの方から御文が来た。また天下の空言そらごとだるうと思えるので、気強く「只今は心もちが悪うございますので、い

ずれ後ほど 「とそのまま使いの者を返させた。そんな事もあつた。

七月、 お盆が近いので何かと世間では騒ぎ出していた。毎年母の盆ぼん供にの事だけはあの方が几帳面きちょうめんになさって下すっていたのに、今年はどうなるのやら。もうあの方も私からお離かれになったのかと、亡き母も地下で悲しくお思いになるかも知れない、しかしまあ、もうすこし待って見ようと思っていたところへ、何時ものようにちやんと盆供を調べて下すつた上、御文まで添えてあつた。私はそこで「亡くなった人の事はお忘れてないと見えます。しかしわたくしの事などは いいえ、こんな果敢はかない身の事などは、本当に自分でも忘れられたら忘れてしまいたい位なのですものを」と例によって少しひねくれて書いてやった。

やがて相撲すまいの頃になった。もう十六になった道綱がしきりにそれへ往きたそうにしているので、装束をつけさせて、先ず殿のもとへと言いつけて出してやった。その夕方、あの方が車の後しりへでも乗せて送って来て下さるかと思っていると、他の人に送られて来た。その次の日も道綱は出かけて往つたが、夕方、また雑色ぞうしきなどに送られて来た。子供心にも、いつもなら御一緒に送って下さるものと、そうやって一人ぼっちで帰って来るのがどんな思いであろうに。……

ところが、八月にはいって、或日の夕方、突然あの方がお見えになった。「明日は物忌ものいみだから門を強く鎖とざしておけ」などとお言いつけになって入らっしゃるらしかった。私はもう物も言われない位、胸が沸き立つような気もちがしていると、あの方は道綱をお側に引

きよせられて、そんな私の方をちらっと見やつては、何かひそひそと耳打ちしていらしっていた。「我慢をしておいで」なぞと囁いているのが、ふと私の耳にも入ったりする。しかし私はどうにもしようがなしに、黙ったまま向き合っていた。翌日も、一日中あの子をお側に置かれて、「おれの心もちはずつとも変らないのに、それを悪くばかりとるのだ」などとお聞かせになって入らっしゃるらしいが、
った。

それから、どうした事やら、不思議なほどあの方は屢お見えになるようになった。この頃急に大人寂びてきたような道綱があの方のお心をも惹いたものと見える。それはあの方が何時になくいろいろとあの子の御面倒を見て下さって、今度の大會には何か禄を給わらせよう、それから元服もさせようなどと、仰り出しているのも分かるのだった。私までも一頃はいささか昔に返ったような気もちになりかけていた位だった。

が、道綱の元服もとどこおりなく果てたかと思うと、またしばらく例の御物忌とやらでお見えにならないようになった。毎日のように、道綱は内裏に一人で出て往つては、また一人で淋しそうに帰ってくる。そんな或日の事、あの方が「きょうは往けたら往こう」などと御消息を下すつたので、もしやと思ってお待ちしていたが、その夜も空しく更けて往くばかりだった。やがて気づかっていた道綱だけが、ただ一人で浮かない顔をして帰ってきた。そうして「殿も只今御退出になりました」などと語るのを聞いて、いくら夜が更けていたって昔ながらのお心さえおありだったならばこんな事はなさるまいに、と私は胸が潰れるような思いがした。それから、また、以前のようになり、音沙汰がなくなってしまうていた。

やっと十二月になって、七日頃にあの方がちよいとお見えになった、何だかもう顔を見られるのも不快なので、几帳をよせて、その陰に引きこもっているとお出いでになったばかりなのに、「日が暮れたな。どれ、これから参内せねば」と仰おつれやってお帰りになられたぎり、音信もなくて、十七八日になった。

その日の昼頃から、雨がそんなに強く降ると云うほどではなしに、ただ何となく降りつづいていた。こんな日なんかには若もしやと云うほどの気にさえなれず、私はしようことなしに昔の事などを思い出しながら、昔の自分が心待ちにしていたすべての事と今の自分とは何と云うひどい相違だろう、あの頃はこんな雨風にだって御いといなさらぬものをと自分は信じていたのに、なんぞと考え続けていた。しかしいま、こうやってしみじみと思い返して見ると、その頃だつて自分はちつとも気の緩ゆるむような心もちのした事なんぞはついぞ無かつたようにも思われた。これと云うのも、一体、以前から自分の心が驕おごっていたのだらうかしらん。ああ、こんな事になるなんて自分は夢にも思わなかつたものを。それほどまで私は大きな夢を持ちつづけていたの。……

そんな雨がそのまま小止みなしに降りつづいているうちに、やがて灯ともし頃となった。南面みなみおもてには、この頃妹のところへお通いになって来られる御方がある。足音がするようだから、きっとその御方がおいでになったのだらう。私が「まあ、こんな雨だのによくいらっしやるわね」と自分の沸き立つような心を抑えつけながら、独言のように言うと、私の前に坐っていた古女房が「昔の殿でしたら、これ以上の雨にだって、御いといなさらずにいらしたものですの

に「とすこし涙ぐんで応えた。私はじつと無言のままだったが、そのうちにふいと何か熱いものが頬を伝い出したのに気がついて、覚えず「思ひせく胸のほむらはつれなくて涙をわかすものにざりけると口を衝いて出たままを口の中で繰り返し繰り返していた。そうしてとうとうその儘、そんな臥所でもない所で、私はその夜はまんじりともせずに過ごしてしまった。

その四

去年の春、呉竹を植えたいと思って人に頼んでおいたら、それから一年も立ったこの二月のはじめになって漸つと「さし上げますから」と言ってきた。「いいえ、もう少しも長らえたいとは思えなくなりまして此の世に、何でそんな心ないような事をして置けましよう」と私がことわらせると、「まあ、大へん狭いお心ですこと。あの行基菩薩は行末の人のためにこそ、実のある庭木はお植えなされたと申すではありませんか」などと言ひ添えて、その木を送つてよこしたので、つい私もそれに気もちを誘われるがままに、「そう、此処はこの上もなくふしあわせな女の住んでいた所だと、見る人は見るがいい」と思つて、胸を一ぱいにさせながら、それを植えさせた。

それから二三日して、雨がはげしく降り、そのうち東風までも吹き加わつて来たので、あの呉竹はどうなったかしらと思つて見やると、もうそれは二三本傾いてしまつていた。早く元のようにしてやりたいと思ひながら、雨間を待っているうちに、しかしこう云う自分だつて、何時その行末はこんな思いがけないような事になるかも

知れないのにと、またしても例の物思いをし出そうとしている自分に気がつくのと、私はもうそんな自分をば勝手に一人で苦しませるために、さっきの呉竹がますます傾き出しているのを、わざとそのままにさせて置いた。

この頃あの方はずっと近江とか云う女のもとへお通い詰めだと云う事をお聞きしていた。

そんな或日の事、あの方から珍らしく御消息があつて「私の心の怠りでもあるが、いま忙しい事も忙しいのだ。夜分でもと思うけれど構わないか。何だかお前が怖いような気もするが」などと書いておよこしになった。私は「只今気分が好くありませんので何も申し上げられません」と素っ気ない返事を行ったが、そのすぐ跡からそんな返事を行った事でもって自分から絶え入るような思いをしていると、その夜、あの方はいかにも平気そうな御様子をなすつてお見えになった。ほんとうに悔やしいと思つて口も利かずにいると、あの方は悪びれもせず常談ばかりお言いになつていらした。それが私にはとても辛くて辛くて、とうとうこの日頃ずっと我慢しつづけていた事をお訴えし出していると、そのうちにあの方は何とも御返事をなさらなくなつてしまつた。そうしていつの間にかもう寐ね入つてしまわれたようだったので、私は急に気抜けがしてそのまま黙つていると、その時ふいとあの方は薄目をお開けになつて、そう云う私に「どうしたのだ。もう寐ねてしまつたのか」と意地悪そうにお笑いかけなすつた。けれども、私はもう石のように押し黙つたぎり、そのまま夜を明かしてしまつたので、翌朝あの方は物もお言ひにならずにお帰りになられた。

それから二三日するかしないうちに、あの方は何事もなかったかのように、例の縫物などを持って来させて、「これを仕立ててくれ」などと言っておよこしになった。が、私はそれには手もつけずに、そっくりそのままそれを返えしてやった。

三月も末近くなってから、父が京に上って来られたので、私はあんまりこうして暮してばかり居ても息苦しくって溜たまらなかつたし、それに忌いみも違たがえがたら、しばらく父の所へ行くことにした。そちらで、この間から思い立っていた長精進もはじめようかと思ひ、いろいろその支度をし出しているところへ、あの方から御文があつた。相変らず「勘当は未だなのか。もう許してくれるなら、暮方にでも往きたいがどうだ」などとある。私がおのまま返事を出さずにいると、人々がそれではあんまりだと言つてうるさいので、「二た月もお見えにならなかつたのに、不思議な御文ですこと」とだけ返事を書いてやった。少しでも早く静かに落着きたいと思うので、急いで父の家へ引き移つて往つた。月のない空に、夜まで一そう更けまさつて見えた。いつものように私の胸の中は沸きたぎるようだったけれど、父の家は手狭でもあつたし、生憎あいにく人もごたごたしていたので、息もろくにつけずに、胸に手を置いたような、重くろしい気もちでその夜は明かした。

思ったとおり、あの方からはそれつきり何の音信もなかつた。

四月にはいると、道綱を側に呼んで「お前も一しよにおし」と言つて、いよいよ長精進を初めた。と云つても別にものものしくはせず、ただ脇息きょうそくの上に香を盛つた土器かわらけを置いたぎり、その前で一心

に仏にお祈りした。その祈る心も只「大へん私は不為合せでございました。昔から苦しみばかりの多い身でございましたが、この頃はほんとうにもう生きている空もない程でございます。どうぞ思い切つて死なせて、菩提をかなえさせて下さいませ」などとばかりで、少しさしぐみながらお勤を続けていた。

ああ、一昔前、此頃は女だつても数珠をさげ経を手にしていない者はない位だと人々の語るのを聞き、「そんな尼のような御顔をなすつていらつしやるから真におなりになるのでしょうか」などと非難めいた事まで言った、その頃の自分の心は何処へ行つてしまったのやら。そんな事を私が言っていたのを聞いた人々がもしいまの私を見たら、こうして明け方から日の暮れまで倦ゆまずにお勤しているのを、まあ、どんなに笑止に思うことだろう。こうまで果敢ない人生をどうしてあんなに気強い事が言えたのかと、いまさらながら昔の自分のそんな無信仰が悔やまれてならないのだった。

そうやって二十日ばかりお勤をしつづけている間に、私は夜分になると何だか苦しいような夢ばかり見せられていたが、或晩などは、私はそんな夢の中で、腹のなかを這いまわっている一匹の蛇のために肝を食べられていた。あんまり恐ろしかったので思わず目を覚ましたが、それからまた私がうとうとしかけると、また夢でもつて、それを癒すには顔に水を注ぐが好いと、何人とも知れずに教えてくれた。

そんな夢の吉凶などは自分にはわからないけれど、こうやって此処に記して置くのは、このような私の身の果てを見聞くだろう人が、夢とか仏などは果して信ずべきか否か、それによって決めるがよいとも思うからである。

五月になってから、私は物忌も果てたので、自分の家へ帰った。

私の留守の間、すっかり打棄つちぢらかしてあったので、草も木も茂るがままに茂っていたところへ、程もなく長雨ながさめになってしまったものだから、前よりも私の家は一そう鬱陶うつとつしい位であった。雨間あまを見ては、お勤の暇々に、私も少しずつ手入れをさせ出していたが、そんな或日の事だった。私の家の方へあの方のお召車らしいのがいつものように仰々しく前駆させながらお近づきになって来られた。丁度その時私はお勤をしていたところだった。人々は「殿がいらしたようだ」などと騒ぎ出していたが、どうせいつものようなだろうと思いはしたものの、私も胸をときめかせていると、やっぱりあの方は私の家の前はそのままお通り過ぎになってしまわれた。皆はもう物も言えずに、ただ顔と顔とを見合わせているばかりらしかった。私だけは何気なさそうに、さつきから止めずにいたお勤をなおも続けているようなふりをしていたが、しかし心の中には何かいままでについぞ覚えた事のないような、はげしい怒りにも似たものを涌わき上げさせていた。

六月の朔ついたちの日、「お物忌のようですから」と門の下から御文をさし入れていった。おかしな事をすると思って、披いて見ると、「もうそちらの物忌も過ぎただろうに、何だっけいつまで余所よそへ往っているのだ。どうもわかり難そうな所なので、つい伺わずにもいるが。こちらの物詣ものもうでは穢けがれが出来たので止めた」など書いてある。

こちらへもう私の帰って来ている事を今までお聞きにならずにいる筈はないと思われるので、一層腹が立ってならなかったが、やっと

それを我慢して、「こちらにはずっと前から帰っておりました。そんな事なぞどうしてあなた様にお気づきなされましようとも。わたくしの知った所なんぞとは違った、思いもつかないような所へしじゆう御歩きなされていらっしゃるのでしようから。何もかもみな、今まで生き長らえている私の身の怠りなのですから、いまさら何も申し上げようもござりませぬ」と返事を書いて持たせてやった。

本当にこんな風にとどき思い出されたように何か気安めみたいな事を言つて来られたりなんかすると、反つて私には辛くつてならない。不意にでもあの方にやつて来られて、またこの前のように侮やしい事もないとはかぎらない。こんな私なんぞは、いつその事これつきり何処かへひそかに身を引いてしまった方がいいのではないかしら。「そう、それがいい、そうだ、西山にはこれまでもよく往つた寺があるけれど、あそこへ往つて見よう。あの方の御物忌のお果てなさらぬうちに」と私は突然思い立つなり、一日も早くと思つて、四日の日に出かけることにした。

丁度その日はあの方の御物忌も明けるらしいので、気ぜわしい思いで、いろいろ支度を急がせていると、人々が上庭うわむらの下から何か見つけ出して「これは何でしょう」などと言ひ合つていた。ふと見ると、それはいつもあの方が朝ごとにお飲みなすつていた御薬たつがみが檀紙の中に挿まれたままになつて出て来たのだった。私はそれを受け取つて、その紙の上に「所詮生れ変らねばと思つては居りますけれど、何処ぞあなた様がわたくしの前を素通りなされるのを見ずにもすむような所がござりましようかと存じまして、今日参ります。ああ、また問はず語りをいたしてしまいました」と書きつけ、その中に元

のように御薬を入れて、道綱に「もし何か訊かれそうだったら、これだけ置いて早く帰っていらっしやい」と言いつけて持たせてやった。

それを御覧になると、余程あの方もお慌てなされた見え、「お前の言うのも尤もだが、まあ何処へ行くのだから知らせてくれ。とにかく話したいことがあるので、これからすぐ行くから」と折返し書いておよこしになった。それが一層せき立てるように私を西山へと急がせた。

その五

山へ行く途中の路はとり立ててどうと云うこともなかったが、昔、屢しばしばここへあの方とも御一しよに来たことのあるのを思い出して、「そう、四五日山寺に泊ったことのあるのも今頃じゃなかったかしら、あのときはあの方も宮仕えも休まれて、一しよに籠こもって入らしたっけが」などと考え続けながら、供人もわずか三人ばかり連れたきりで、はるばるとその山路を辿たどって往った。

夕方、漸やつと或淋しい山寺に着いた。まず、僧坊に落ちついて、あたりを眺めると、前方には籬まがきが結われてあり、そこいら一めんに見知らない夏草が茂っていたが、そんな中にぽつりぽつり竜胆りゅうたんがもう大かた花も散ったまま立ちまじっているのが佗わびしげに私の目に止まった。

湯などに入ってそれから御堂に思っているところへ、里の方から人が駈けつけて来たようなけはいであった。留守居の者の文を急いで持ってきたのだった。読んで見ると、私の出かけた跡にすぐ殿

からお使いの者が見えて私を引き止めるようにと云いつかつて参つた由、留守居の者が私の出立しゅつたつの模様やそれから日頃の有様などを精くわしく話して聞かせると、その男までつい貰い泣きをし、「ともかくもその事を殿に早くお知らせ申しましょう」と急いで帰った由、やがてそちらへ殿が御自身で御迎えに往かれる事になりそうですからその御用意をなさいませなどと細々と書いてきた。あれほど此処へ来ている事をあの方にはお知らせしないようにと固く言い置いてきたものを、あの人達したら何んの考えもなしに、その事ばかりでなく、おまけに有ること無いことまで大げさに話して聞かせたのだろう。ああ、何だか物々しい事になってしまいそうな、 と思いつながら、ともかくもそうになったらそれまでと、湯の事を急がせて、御堂に上った。

暑かったので、しばらく戸を押しあけて眺めやっていたが、此処は丁度山ぶところのようなところになっていると見える。周囲にはすっかり小さな山々が繞めぐっていて、それらが数知れぬような木々に覆われているらしいけれど、生憎あいにく月がないので、殆ど何も見わけられない……

そうやって戸を押しあけたまま、御堂で初夜しよやを行っているうちに、何時なのだろうかしら、時の貝を四つ吹くほどになった。そのとき急に大門の方に人どよめきがし出したので、巻き上げていた簾みすを下ろさせて透して見ていると、木の間から灯がちらちらと見えてくる。やっぱりあの方は入らしたのだ。

門のところまで、道綱は急いで御迎えに出て往つたらしかった。やがて戻ってきて、あの方が車にお立ちになったままで「御迎えにやって来たのだが、生憎きようまで穢けがれがあるので、車から下りら

れない。何処かに車を寄せる所はないか」と仰おっしやっていると取り次
いだが、私はそれには全然とり合わずに、「何をお考えちがいなす
つて、そんな向う見ずな御歩きをなさいませ。今宵だけでもと思っ
てわたくしは此処へ参まゐっているのです。もう夜も更けておりましよ
う。早くお帰りなさいませ」と返事をさせた。それからそんな文の
往復を何度となく為しあ合った。一丁ほどの石段を上ったり下りたりし
なければならぬので、それを取り次いでいた道綱は、しまいには
疲れ果てて、ひどく苦しそうな位にまでなった。その上、殿が、こ
れ位の事がとりなせないのか、腑甲斐ない奴だな、などと大へん御
気色が悪いと言つて、いかにも切ながつていた。それを見ていた側
の者たちはしきりに不便ふびんがつていたが、私は何処までも自分を守り
通して拒絶したので、あの方もとうとう「よしよし、おれは穢けがれが
あるからこのままこうしても居られない、車をかけてくれ」と「#
」と「は底本では」と「」仰おっしやつてそのまま御帰りなされるしか
つた。私が覚えすほつとした気もちでいると、思いがけず、道綱ま
でが、「まるもお送りして往きます。お車の後しりへでも乗せて往つて
いただきましょう。そうしてもう二度とまるもこちらへは参りませ
んから」と言い残したぎり、泣き顔をして出て往つてしまった。ど
んな事になつたつてこの子だけは自分のものだと思つていたのに、
まあ、この子まで、何んむこて酷いことを言うのだろうと呆れながら、
私はもう物も言えずにいた。が、しばらくして、皆がもう出て往つ
てしまつただろうと思える時分になつて、ひょっくりと道綱だけが
戻つてきた。そうして「お送りいたそうとしましたら、殿がお前は
こちらで呼ぶとき来ればいいと仰せになりました」と言うなり、も
う溜たまらなくなつたように、そこに泣き崩れていた。本当にどうい

お気もちなのだか自分にもわからなかったが、「いくらあの方だつてお前までをこの儘ままになさりなどするものですか」と言いすかしながら、さまざまに道綱を慰めているうちに、いつか時は八つになっていた。こんな夜更けてからのお帰りを皆はお案じしながら、「路も大へん遠いのに、御供の人々も居合せたものだけしかお連れなさらなかったと見え、京の内の御歩きよりも人少なだったようでしたけれど」「などと言いつつ合っていたが、私だけは無言のまま、強いてつれないような様子を見せていた。

しかし夜の明けかかる時分、道綱がゆうべの事をしきりに気にしては「御門のところからでも御機嫌伺いをして参りましょうか」と言いつづけているので、少しいじらしい気もし、文をもたせて京へ立たせてやった。「ゆうべはずいぶん向う見ずな御歩きと存じましたが、夜も更けておりましたので、ただみ仏に無事にお送り下さるようにとお祈り申し上げて居りました。それにしても何をお考えちがいなすつて入らっしゃるのでしょうか。大へん頭が痛みますので、いますぐ帰ることも難しいかと思われませんが」「そんな事をなにくれと書いて、その端に、「途々みちみちも、昔御一緒に参ったことのあるのを思い出しながら参りましたが、ほんとうにあなた様の事ばかりお思い申し上げて居るのです。やがてわたくしも此処を下ります」と書き添えた。

道綱を立たせてやってから、明け方の空をぼんやりと見やっていると、雲だか、霧だか、分からないようなものが、下の方から見ると、見るうちに涌わいて来て、それが互せめに鬨あぎ合あってはどちらとへともつかず動かされながら、そこいら一面を物凄いほど立ちこめ出してい

た。
……

昼頃、京から道綱は帰ってきた。「御留守でしたので御文は預けて参りました」という事だった。そうでなくとも、どうせ御返事はないに極まっていると私は思った。

さて、昼はひねもす例のお勤をし、夜は主のみ仏にお祈りをする。周囲は山ばかりだから、昼間だって人に見られる気づかいはなかった。たので、簾みすなどもすっかり巻き上げさせたぎりだった。ただ、ときどき思い出したように間近かくの木々から鳥が何やら叫びながら飛び立つのに、覚えすぎくりとして誰か人でもと、あわてて簾を下ろしかけては、漸やっと見知らない鳥が二三羽一翔かけ去さただけなのに気がつくような事もあった。そんな時など、それほど空うつけたようになっているおりおりの自分の姿が、私にも何かしら異様に思われたりするのだった。

そのうちほどなく身が穢けがれになったので、私は一度里へとも思っただが、すぐ思い返して、その間だけ寺から少し離れた或みすばらしい山家に下りている事にした。それを聞きつけて、京から伯母などがやって来てくれた。そんな馴れない山家住いだものだから、何だかちつとも気もちが落着かず五六日を過しているうちに、もう月の中程になってしまった。山陰の暗いところを蛸たぬが小さく光りながら飛ぶのがしきりなしに見えた。里でまだしも物思いの少なかった頃には、ついぞ二声と続けて聞いたことのないのを怨うらめしがった時はと鳥ぎすも、いまはすっかり私にも打ち解けて、殆ど絶え間もなしに啼ないていた。水くいな鶏なだって、わが家の戸を叩いたかと思うくらい近くを啼

いてゆく。それにしても、何んとまあ物思い自身の巣くつてい
るような栖すみなのだろうか。それは自分から思い立ってこうして
居るのだから、誰も訪れてくれる者はなくとも、ちつとも辛いなど
とは思ひもしないし、むしろ気安くていいとさえ思ってはいるもの
の、只、歎かわしいと思うのは、こう云う物思いにもってこいのよ
うな栖をさえ自分から好んでせずにはおられなくなった自分の宿世すくせ
の切なさ、それともう一つは、自分の死後に、日頃こうして
自分の傍を離れずに長精進なども共にして頼もしげに見える此道綱
が、他には力にすべき人も居ないのでさぞ世間にも出にくいだろう、
それにこうして精進している自分と同じような粗末な物をばかり食
べさせているので、この頃はよく喉のどにも通らぬらしいのを見るのが
自分には辛くてしようがない。そんな事を考え続けながら、こ
んな思いを自分もし又子供にまでさせて漸つとこうして自分が気安
くしているのかと思うと、遂にはその気安さそのものさえ自分を苦
しめ出してくるのだった。ああ、私は一体どうしたらよいのである
うか。……

夕暮の入相いりあひの音、蝸ひびのこえ、それからそれにつれて周囲の小寺か
ら次ぎ次ぎに打ち鳴らされる小さな鐘などをぼんやり聞いていると、
何んともかとも言いようのない気もちがされて来るのだった。

身の穢けがれている間は、一日中、何もすることがないので、端近く
に出ては、私はそうやってしまえば自分を言いようもなく苦しめ
出すのが知れ切っているような物思いばかりをしていたのだが、
或夕方も私がそんな端近くでいつまでもぼんやりしていると、後ろ
から道綱が気づかわしそうに「もうおはいりになりませんか」と私

に声をかけた。子供心にも私に物をあんまり深く思わせまいとするのだろう。しかしもう少しこうして居たいと思つて、そのまま私がじつとしていると、再び道綱が「何だつてそんな事をなすつて入らっしゃるのですか。お体にだつてお悪くはありませんか。それに、まるはもう睡くつてたまりませんから」と言いかけるので、私はついそんな子供にまで、まるで自分自身に向つて言いでもするように、「お前の事だけが気になつて、こうして長らえているのだけれど」と言い出した。「どうしたら好いのだろうね。尼にでもなつたら一番好いのかしら。この世に居なくなつてしまふよりか、そうでもして生きていたら、お前にしたつてお母あ様の事が気にかかればすぐ会いにも来られるし、それでいてあとはもうこの世に居ないものだ」と諦めてもいられるでしょう。　　そうやつて尼になつたつて、お前のお父う様さえ本当に頼りになるのなら、お前の事は少しも心配は入らないのに、それがどうにももどかしいような気がするので、こうやつて物思ひばかりしているのだけれど……」と、ひとりごとのように言い続けているうちに、ふとこんな言葉が、かわいそうに、此の子をどんなに苦しめているのだろうと気がついて、私は突然言つのを止めた。思つたとおり、道綱はもう返事もできない位、私の背後でやつと泣くのを堪えているらしかった。

五日ばかりで身が浄きよまつたので、また私は御堂に上つた。ずっと来ていて下すつた伯母もその日お帰りになつて往かれた。その車がだんだん木の陰になりながら見えなくなつて往くのをじつと見送つて佇たすんでいるうちに、逆上でもしたのだろうか、私は急に気もちが悪くなつてひどく苦しいので、山籠やまいもりしていた禅師ぜんじなど呼びにや

って加持して貰った。夕ぐれになる頃、そんな人達が念誦ねんじゆしながら加持してくれているのを、ああ溜たまらないと思つて聞き入りながら、年少の折、よもやこんな事が自分の身に起ろうなどとは夢にも思わなかつたので、そうなつたならどんなだろうなどと半ば恐いもの見たさに丁度このような場合を想像に描いて見たことがあつたが、いまその時の想像に描いたすべての事が一つも違わずに身に覚えられて来るようなので、何だか物の怪ものけでも憑ついて、それが自分にこんな思いをさせているのではないかとさえ私は思わずにいられない位だつた。

それほど、まるで何かに憑かれてもしたかのように、私が苦しみながら山に籠こもっているのを、京では人々が思い思いにああも言いこつても言っているようだし、のみならず、この頃では自分が尼になつたというような噂まで出して居るらしかつたけれど、私は何を言われようと構わずにいた。それが善いにせよ、悪いにせよ、こつ云うような私をそっくりそのまま受け入れてくれるのは父ばかりだと思えたが、この頃は京にいらつしやらないので、田舎の方へすぐ便りを出して置いたところ、このほどその父から「そうして居るのも好いと思う。なるべく目立たぬように、暫くでもそうやってお勤をしている分には、気も安まるだろうから」などと書いておよこしになつた。父にだつて今の私の苦しい気もちは殆ど御わかりになつて居そうにも見えないながら、それなりにもそう父のように仰おつしやつて下さるのが一番私には頼りになるのだ。それにしても、私がこうして居るところをこの間御覧なすつて帰られたぎり、まだ一度も御消息さえおよこしにならないなんて、まあ、あの方は一体私がどん

なになったならば、私の事をもお顧みになって下さるのだろうか。そう思うにつけ、私はこれよりもっと深く山に入るような事があろうたつて、どうして里へなんぞ下りるものかと、ますます思いつめて往く一方だった。

或朝、道綱に無理に「魚でも召し上つて入らっしゃい」と言いつけて、京へ立たせてやった。が夕方近くなって、もうあの子も帰ってくるだろうと思っていた時分、俄かに空が暗くなり、つめたい風が吹きはじめたかと思うと、あたりの木々の葉がさあつと無気味にざわめき出した。悪いときに夕立になったなと思う間もなく、すぐもうそこで雷がごぼごぼと物凄いような音を立て出した。途中

でこんな夕立に出逢つて、まあ、どんな思いをしているだろうと道綱の上を気づかないながら、几帳きちようのかけに小さくなって、私はじつと息をつめていた。おりおり山のずうつと彼方に雷の落ちるらしいのが、そんなに怯おびえた心には、すぐ目のあたりに落ちたのかと思われ、そんな中もってさえ、私はいつの間にか、いつその儘ままこうして自分が死にでもしたら、せめてはそんな痛ましい最後がおりおりあの方に自分の事を思い出させ、そのお心を充たしてくれるかも知れない。などと考え出していたが、しかし私はこうしているだけでさえ怖くて怖くて、顔も上げられずに、いつまでも俯うつぶ伏したきりになっていた。

やがてあたりが薄明くなり出したのに気がついて、私ははつと何かから醒さめたような気もちになりながら、そんなちよつとの間だけ、殆ど忘れ去っていた道綱の事を前よりも一層気にし出していた。それからほどなく、道綱は心もち蒼い顔をしたまま、無事に帰ってき

た。「夕立が来そうでしたので、いそいで帰って参りましたが」と、途中の山路で夕立に逢った有様を恐ろしそうに話した。

こんどはあの方の御文を托せられて来た。「若したまたま山を出られる日があつたら前もって知らせてくれ。迎えに往こう。何だかもうそちらで私の事なんぞはすっかりお見棄てらしいから、こちらから近寄るのはすこし怖い」などとある。私はそれを貧るFRUCTように読んでしまうと、すぐ何でもないようにそれをそのまま打棄てて置いた。

それから二三日後、道綱が「どうか先日の御返事を下さいませんか。又お叱りを受けるかも知れませんが、早く持参したいと思ひます」としきりにせびるのだった。私はもうあの方にそんな返事など上げる気もちにはなれそうもなかったので、何のかのと言い紛まぎらしていたが、しまいには道綱が可哀そうになつて、何を書いたのやら自分でも思い出せないような事ばかりを書いて持たせてやった。

すると、又、この間と丁度同じような時刻になると、突然夕立が来た。そうしてこの前よりもつとはげしいかと思えるような雷が鳴り出した。しかし今度は私は、簾みすも下ろさずに、横なぐりの雨に打たれながら木々が苦しみもだえるような身ぶりをしているのを、ときどき顔をもたげては、こわこわじつと見入っていた。そうして私は、もし自分が本当に苦しむことを好んでいるのだったら、こんなに何もこわがりはしないだろうにと思いかえしながら、だんだん長いことそれを見つめ出していた。ときおりそんな自分の目のあたりを、その稲光りとともに、何処かの山路で怯おびえている道綱の蒼ざめ切った顔が一瞬間一閃きんいて過よぎつたりするのだった。……

が、そのうちに、私はそれにもめげずに、じつと空中に目を注いだなり、いつか知らず識らずの裡うちに自分自身をその稲光りがさつと浴びせるがままに任せ出していた。恰あたかもそうやって我慢をしている事だけが自分のもう唯一の生き甲斐でもあるかのように。……

その六

或日の昼頃、突然、大門の方で馬が気もちのいいくらい高く嘶いなないた。それがどういうわけか、私のうちに言うに言われないような人なつかしさを蘇よみがえらせた。……それからやがて人のおおぜい来たらしい気配がしだした。簾を透かして見ていると、立派な装束をした人々も数人見え、それが木の間をこちらへだんだん近づいて来るのだった。その中には関白殿の御子息の兵衛佐ひょうえのすけなどもお見えになっている。先ず、道綱をお呼び出しになって「これまで大へん御無沙汰申していたお詫わびかたがた、こうやって参りました」と私の方へ取り次がせて置いて、そのまま物静かに木の陰にお立ちになって居られるその兵衛佐の御様子は、何とも言えず奥床しく、京ちかく覚えられる位であった。

「大へんお懐しいことです、どうぞこちらへおはいりなさいますよ
うに」と私はすぐお通し申させた。すると兵衛佐は勾欄こうらんにもたれて手水などされてから、こちらへおはいりになって入らした。いろいろの物語のついでに「昔わたくしとお会あいしたのを覚えていらっ
しゃいますか」と私になつかしそうに訊きくと「どうして忘れなど
いたすものですか、確かに覚えて居りますとも。今こそこう心ならず
も疎遠そげんにいたして居りますが」などとお答えなされて、それか

らそれへとその昔の頃の事を一しよになつて思い出しながら、さまざまな物語を続けていた。が、そのうちに私がふいと物を言いかけて、何だか急に声に変になりそうな気がしたので、そのまま少しためらつてみると、相手にもそれがおわかりになつたものと見える。すぐには物も仰おっしやられずにいたが、やつと兵衛佐は口を開かれて「お声までがそうお変りなされるのも尤もつともの事とは思いますが、もうそんな事はお考えなさいますな。このまま殿がお絶えなされるなんという事があるものですか。どうしてそう御ひがみなされるのか、私共にはわかりませぬ。殿もこちらへ参つたらようく言つて聞かせてやつて呉れなどと仰せられていました」と私を慰めるように言われる。「何もあなた様にまでそう云う御心配をしていただかなくとも、いずれそのうち此処からは出るつもりなのですけれど」と私がいつになくつい気弱な返事をする、「それなら同じ事ですから、今日お出になりませんか。私共もこのまま御供いたしましょう。何よりもまあ、この大夫がときどき京へ出られては、日さえ傾けばまた山へお帰りを急がれるのを、はたで見えていましても本当にお気の毒なようで」「などと道綱の事まで持ち出して切に口説かれるけれど、私はもう何か他の事でもじつと思いつめ出したように、返事もろくろくしないようになった。そのうちに兵衛佐もとうとうお諦めになつたように、しばらくまた他の物語などし出されていたが、それももう途絶えがちで、夕方になると、お帰りになつて往かれた。

そういう兵衛佐などにお目にかかるにつけ、ふいと京恋しさを溜たまらないほど覺えたが、それをやつと抑えつけながら、ただお懐しそ

うに昔物語をし合っただけで、つれなく京へお帰ししてからと云うもの、私が何とはなしに気の遠くなるような思いで数日を過ごしていたところへ、京で留守居をしている人の許もとから消息があつた。「今日あたり殿がそちらへ御迎えに入らっしゃるようには伺いました。この度もまた山をお出なされないようですと、世間でもあまり強情のように思うでしょうし、それに後になってから、もし山をお出なさりでもしたら、それこそどんなに物笑いの種になりますことやら」などと言ってきた。そんな世間の噂なぞどうだつて構いはしないのだ、いくらあの方が御迎えに入らしたつて、自分で出たい時にならなければ出やしないから、と私は自分自身に向つて言っていた。丁度その日、私の父が田舎から上洛して来たが、京へ著つくなりその足ですぐやつて来て下すつた。そうしてさまざま物語をし合つた末、父はつくづくと私を御覧になりながら「そうやつて暫らくでもお勤をするが好いと私も思っていたが、大ぶ弱られたようだな。もうこの上はなるべく早く出られた方が好いだらう。今日出る気があるなら一緒に出ようではないか。」そんな事を父までがいかにも確信なされるように仰り出すのだった。私はそれにはどう返事のしようもなく、まったく一人で途方に暮れてしまっていたが、そういう私にお気づきになると「じゃ、また明日でもやつて来て見よう」と気づかわしそうに言い残されたまま、その日は父も急いで下山すつた。

それから数刻と立たないうちに、大門の外に突然人どよめきがし出した。とうとうあの方が入らしたのだらうと思うと、私はますます一人でもつてどうしたら好いか分からなくなつてしまつた。今

度はあの方も遠慮なさらずにずんずん御はいりになって入らっしゃるようなので、私は困って几帳ねぢやうを引きよせて、その陰に身を隠しはしたけれど、もうどうにもならなかった。其処そこに香かや数珠ずすや経きやうなどが置かれてあるのをあの方は御覧なされると「これは驚いた。まさかこんなにまで世離れていようとはおれも思わなかった。若もしかしたら山を下りられはすまいかと思つてやつて来て見たが、これでは山を下りでもしたら罰があたるだろう。　どうだ、大夫、お前はこうしているのをどう思っているな」と傍にいた道綱をお振り向きになつて尋ねられた。「大へん苦しゅうございますが、いたし方がござりませぬ」と道綱は打ち伏したまま答えた。「かわいそうに」とあの方は仰おつしやられながら「じゃ、とにかくお前がお母あ様に出ていただきたいと思われるなら、車をこちらへ寄こしてくれ」とお言いつけなさりも果てぬうちに、もうあの方はお立ちになつたままで、そこいらに散らばつていた物なんぞを御自分で取り集められ出した。そうしていつの間にか其処そこに寄せられたお車の中へそれをみんな入れさせ、それからその居間に引いてあつた軟障せじやうまでも御はずしになり出していた。

私が呆れて物も言えずにそれを見てみると、人々は互に目食めくわせしたりしながら、笑を含んで、そういう私の方を見守っているらしかった。「こうしてしまつたら、此処をお出でになるより外はあるまい。まあ、み仏にもよくわけを申し上げると好い、それが作法のようだから　」などと、あの方は事もあろうにそんな常談まで仰やっていた。私はもう一言も口がきけず、車の支度がすっかり出来てしまつてからも、いつまでもじつと身じろぎもせずせにいた。

あの方の入らしたのは申まをの刻頃さだったのに、もう火ともし頃に

なってしまった。しかしまだ私がなかなか動きそうにもなかった。たので「よしよし、おれは先へ往くぞ。あとは、大夫、お前に任せる」と道綱にお言いになって、ずんずん先に出て往かれた。道綱は「早くなさいませ」と私の手をとって、いまにも泣きそうにしていた。こうなってはもうどうにもしようがない、みすみす山を出て行かなければならない私は、自分なんだか他人なんだか分らないようなほどになっていた。……

大門を出ると、あの方も同じ車に乗って来られ、道すがら、いろいろ人を笑わせるような事ばかり仰やっていた。けれども、私は何も言う気にはなれなかった。一しよに乗っていた道綱だけ、ときどき笑を噛み殺しながら、それに内気そうにお答えしていた。

はるばると乗って、やっと家に着いたのは、もう亥の刻にもなっていた。

京では、昼のうちから私の帰る由を言い置かれてあったと見え、人々は塵掃いなどもし、遣戸などもすっかり明け放してあった。私は渋々と車から降りた。そうして心もちも何だか悪いので、すぐ几帳を隔てて、打ち臥していると、其処へ留守居をしていた者がひよいと寄ってきて「瞿麦の種をとろうとしましたら、根がすっかり無くなっておりました。それから呉竹も一本倒れました、よく手入れをさせて置きましたのですが」などと私に言い出した。こんなときに言わずとも好い事と思って、返事もせずに居ると、睡っていられるのかと思っていたあの方が耳ざとくそれを聞きつけられて、障子ごしにいた道綱に向かって「聞いているか。こんな事があるよ。」

この世を背いて、家を出てまで菩提ぼだいを求めようとした人にな、留守居のものが何を言いに来たかと思うと、瞿麦がどうの、呉竹がどうのと、さも大事そうに聞かせているぞ」とお笑いになりながら仰やると、あの子も障子の向うでくすくす笑い出していた。それを聞くと、私までもつい一しょになっておかしいような気もちになりかけていたが、ふとそんな自分に気がつくが早いか、それがいかにも自分でも思いがけないような気がしながら「私と云うものはたったこれっきりだったのかしらん」と思わずにはいられなかった。……

その夜も更けて、もう真夜中近くになりかかった頃、あの方が急にお気づきになったように「どちらが方塞かたふさがりにあたるか」と仰やられ出したので、数えて見ると、丁度此方が塞がっていた。「どうしようかな」と、あの方もお当惑なすったように仰やつて、「ともかくも、一緒に何処かへ移ろうじゃないか」と私をお促しなさるけれど、私は打ち臥したぎり、まあ、こんな事であるものかしらと、胸のつぶれるような思いに身を任せながら、しばらくは返事も出来ないほどになっていた。それから私はようやっとの思いで口を開きながら「また他の日にいらっしやいませ。ほんとうに方かたがお明けになつてから入らっしやると好かつたのですのに」と諦め切つたように言った。あの方も、とうとう外にしようがなさそうに「例の面づくもない物忌ものいみになつたか」とぶつぶつ言われながら、真夜中近くをお帰りになつて往かれた。そういうあの方の後姿は、私の心なしか、いつになくお辛そうにさえ見えた。

翌朝、すぐ御文をおよこしになった。その御文も「ゆうべは夜も更けていたのでひどくつらかつたぞ。そちらはどうだったな。はやく精進明けをしなさい。大夫も大ぶやっ塞ふれていたようだから」と、い

つもに似ずお心がこもっているようだった。こうやってまでして、山から下りたばかりの私をおいたわりになるうとなすって居られるあの方のお心ばえも、そんな生憎あいにくな物忌のために、しばらく私からお遠のきになって入らっしゃる間に、又昔のようにつれなくおなりになられそうな事ぐらひは、私にもよく分かつていた。しかし私には、それをそのままに任せて置くよりしかたがないのだった。

その七

そう云うあの方の御物忌のお果てなさる日を私は空しくお待ちしているうちに、やがて七月になったが、或日の昼頃に「やがて殿がお出いでになる筈です、此方におれとの仰せでした」と言つて、侍どもがやつて来た。こちらの者も立ち騒いで、日頃から取り乱してあつた所などをあわてて片付け出していた。私はそれを何かしら心苦しような思いで見っていた。が、なかなかお見えにならないままに、日が暮れてしまったので、来ていた侍どもも「御車の装束などもすつかりなすつてしまわれたのに、どうして今になつてもお見えにならないのかしら」などと不思議そうに言い合つていた。そのうちにだんだん夜も更けて往くばかりだったが、とうとう侍どもが人を見せにやると、その使いの男が帰つてきて「今しがた装束をお解きになつて御隨身みずいじんたちもお引取りになりました」と告げ知らせた。

その翌朝、道綱が「どうして入らっしゃらなかったのか伺つて参りましょう」と自分から言つて出かけて往つた。が、すぐ戻つて来、「ゆうべは御気分がお悪かつたのだそうです、急にお苦しくなられたので、伺えなくなつたと仰やつておられました」と私に言うのだ

った。そんなお心の見え透くような御言葉なら、いつそ何にも聞いて来なかった方がよかった位だったのに。同じ御返事にしたって、もつと私の気もちをいたわって下さるようなお言葉がお言いにならないものなのかしら。せめてもの事、「急に差し障りが出来たので往かれなくなってしまうた。若しか都合がついたらすぐ往こうと思つていたので、車の用意もそのままにさせて置いたのだが」「なんぞでも言つて下されば、まだしも私の気もちも好いものを。

矢つ張自分の思ったとおり、少しはお心が変られるのかなと考えたのはあの時の私の考え過しで、あの方は相変わらず以前のあの方だけだったのらしい。そうして私だけが　そう、私は少くとも、あの山から帰つて来てからは、もう昔のような私ではなくなりかけているのだ。……

その日もまた、私がそんな考えをとつおいつし出していたところへ、西の京にお住いになつて居られるあの方の御妹から御文があつた。見れば、まだ私があればからずつと山に籠こもつているものとばかりお思いになつていらしつて、何くれと物哀れげに仰おつしやつて「どうしていつまでもまあそんなお淋しいお住いをなすつて入らつしやるのでしょう。そのようなお住いをも一向苦になさらずにお訪ねいたすお方だつておありでしょうに、つれないあの方はこの頃あなた様からもお離かれがちだとか。本当にどうして入らつしやるかと大へん気になつて居りますので、ちよつと　」と書いておよこしになつた。そこで私はつい今もいま考えていたままに「山の住いはずつと秋までいたそうと思つて居りましたのに、又こうして心にもない里住いをいたすようになりまして。　仮りに山に入つても、私のような意気地のない者はまことに中途半端なものでございますこと。だが

私も、今度という今度ばかりは本当に苦しい思いをいたしました。しかしそのような苦しい思いも、みんなあの方が私にお与え下さるものとおもえば反つていとしくて、或時などは自分から好んでそれを求めたほどでございました。どうぞこういう言葉を私がただ奇矯ききょうな事を申すようにお願いなさらないで下さいまし。そういうおりおりの空けた私にはどうかいたすと、そんな苦しみが無ければないで、反つて一層はかなく、殆どわが身があるかないかになってしまいはせぬかと思われる程なのでございますから。只、それほどまで私にとっては命の糧にも等しいほどな、その苦しみのお値打ねうちにも、それを私にお与え下さっている御当人は少しもお気づきになつて入らつしゃいませんようなのですもの。私はそれをば此頃あの方のために何んだかお気の毒に思つております位。本当にこんな人並ならぬ気もちさえいたして居りますほどの私の心のうちは、誰やらの申しました『深山みやまがくれの草』とばかり思えて、いくら繁くとも誰方もお認めなさいますまいと思つて居ります」と書いて送つた。

そう、本当に私はもう昔みたいにあの方のためになんぞ苦しむまいとは思わないが好いのだ。いくらあの方からお離れしようとも、もう自分がお離れできない事はよく私にも分かつている筈だろうから。まあ、こう云つたこの頃の私の切ない心もちと云つたら、あの根を絶たれて、もうすべての葉は枯れ出しながら、しかもまだそのか細い枝は以前のままに他の木の幹にからみついたままである、あの蔓草つるくさに似ているとも言えようかしら。

その八

それからほとんどない或夜の事、思いがけずあの方がひよつくりお見えになった。そうしてこの間の晩の事をしきりにお言いわけなすつて、「今宵こそと思ったから、いみたが忌違えに皆が出かけると云うのを出して置いて、おれだけこちらへ急いでやって来た」などと仰やられていた。しかし私には、そう云うあの方のお心の中がすっかり見え透いてでもいるかのように、あんまり言いわけがましく仰やるのを反っておかしい位に思いながら、あの方をいかにも何気なさそうにおもてなしをしていた。

そんな自分を自分でもずいぶん昔とは変ったなと思っていたが、さすが流石にあの方にもそう云った今の私がまるで別人のようにお見えになるらしく、それが何時も屈託なさそうにして入らっしゃるあの方までを、いくらか不安におさせしているらしかった。しかし、明け方になると、それをただその事の所為せいにでもなさるかのように、「勝手の分からぬ所に参っている者共はどうしているだろうな」と仰やりながら、何か気がかりなように、お帰りになって往かれた。

それからまた数日の後だった。今度伊勢守になられた私の父は、また近いうちに任国へお下りにならなければならなかった。それではしばらくでも御一緒に暮らしたいと思つて、あの方にはお知らせもせず、私は父と共に或物静かな家に移った。そんなにまでしたのに、それから二三日した或一午頃ひる、急に南面の方が物騒がしくなつた。「誰だろう、向うの格子を開けたのは」と私の父までも驚いて、皆と一しよに立ち騒いでいると、そこへ突然あの方がおはいりになつて入らした。そうしていきなり私の前に立ちはだかつて、いくらか色さえお変えになりながら、傍らにあつた香すずや数珠を投げ散ら

かされ出した。しかし私は身じろぎもせず、どんな事をなされようとも、じつところえながらあの方のなさるがままにさせていた。

そんな心にもない乱暴な事をなさりながら、反ってあの方が私にお苦しめられになっているのが、どうという事もなしに、只、そうやってあの方のなすがままになっているうちに、私には分かって来たのだった。しかし御自分ではそれには一向お気づきなされようともせずに入らっしゃるらしかった。

それから漸やつとあの方は御自分にお立ち返りになられたかと思うと、何だつてそんな事をなすつたのかはよくお分かりにならぬながら、急にいままでの何もかもをほんの一時の御戯れだったとでも云うようになさろうとして、私にいつものような御常談なんぞを言われ出した。私も私で、あの方がかりそめにも私のためにお苦しめられたになったなんぞと云う事をあの方にはお分かりにならせぬのが、せめてもの私の思いやりでもあると云ったように、さも何事もなかったようにしていた。しかしあの方はまだ何かがお気になると見え、御常談もいつもほど思うようには仰やれずにいらした。

それからその夜は、あの方は私といつになくお心をこめてお話しになられ出した。私はといえば、そんな事ももう別に嬉しいとは思わずに、只、何もかもすっかりあの方のなさるがままになっていた。そうしてあくる朝になって、やっと平生のいかにも颯爽さつそうとしたお姿に立ち返えられながら、お帰りになって往かれようとなすっているあの方の後ろ姿を、突然、胸のしめつけられるような思いで見入りだしているのは、いつか私の番になっていた。……

底本：「昭和文学全集 第9巻」小学館

1988（昭和63）年6月1日初版第1刷発行

底本の親本：「堀辰雄全集 第2巻」筑摩書房

1977（昭和52）年8月30日初版第1刷発行

初出：「改造」

1937（昭和12）年12月号

初収単行本：「かげろふの日記」創元社

1939（昭和14）年6月3日

底本の親本の筑摩書房版は、創元社版による。

初出情報は、「堀辰雄全集 第2巻」筑摩書房、1977（昭和52）

年8月30日、解題による。

入力：kompass

校正：松永正敏

2004年2月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。